

～荒廃する人心を救う～ いわぶやま 岩部山三十三観音

市指定有形文化財（史跡）

江戸時代の後半、18世紀後半～19世紀前半は自然災害による凶作・飢饉の多い時代でした。特に天保元（1830）年の不作に始まる凶作は、6、7年の大凶作となる最悪の事態を迎え、天保9（1838）年まで続きました。世に言う「天保の飢饉」で、江戸時代の三大飢饉の一つに数えられるほどの大飢饉でした。

天保7（1836）年、米沢藩は15万石の領地で2万3000石しか収穫できないという幕府への報告を行っています。凶作続きで毎年大幅な減収となり、最悪の事態に追い込まれました。各種対策を講じましたが、米の値段はうなぎ登りで、領民は「かてもの」という冊子の教えで何とか餓死を免れているだけだったとも言われています。

村々の有力者など対策に協力奉仕する者も多くいましたが、泥棒その他悪事を働く者も出て、人心の荒廃がひどい有り様でした。

こうした状況の中、川樋・松林寺第16世住職のきんもうおしょう金毛和尚は、岩部山にある巨岩（硯岩、天狗岩、二つ岩、眺岩、屏風岩、鷹巣岩など）に、三十三観音を刻み、毎年続く凶作・飢饉により荒廃した人心を救おうと決意します。

金毛和尚は、西方極楽浄土の教主・阿弥陀如来のきょうじ脇士（本尊の左右に控えている仏像）である観音菩薩を信仰する観音信仰に頼る決心をして、西国三十三礼所霊場を参拝しました。その都度、観音像の姿を写し、ご詠歌を書きとめ、托鉢を続けました。私財を投じ、拝仏した観音を岩に刻む石工や道造り人夫の賃金、開眼供養の費用に充てました。きしや喜捨芳名録（寄附者の氏名を記した帳簿）によると、川樋だけではなく赤湯の東正寺、日影の永雲寺のほか、赤湯、小岩沢、新田、釜渡戸、花窪の賛同者約40人の名前が見られると言います。

置賜地方では、西国三十三観音を模した三十三観音がいくつかあり、本市では岩部山のほかに吉野・筋地区の三十三観音があります。岩部三十三観音は巨岩に刻まれています。他は彫り上げた石の観音像を納めたものです。



一山の三十三観音ですが、巨岩に刻むため広い範囲にわたり、参拝者は苦勞して巡り歩かなければなりません。汗して参拝するときの清々しさは格別で、多くの参拝者は心が洗われたでしょう。岩部山三十三観音は、天保の飢饉による人心荒廃から人々を救った貴重な文化遺産と言えます。

南陽市文化財保護審議委員 佐藤鎮雄

平成26年9月1日号 市報なんよう掲載